

子の死亡事故 防止策は

子どもの不慮の死亡事故の多くは防ぐことができる。交通事故や溺水、窒息などを防止するポイントを学ぶ健康教室が京あんしんこども館（京都市子ども保健医療相談・事故防止センター、中京区）で開かれ、長村敏生センター長が事例を踏まえて解説した。（稲庭篤）

中京でポイント学ぶ教室



子どもの交通事故や溺水、窒息など事故防止のための対策を説明した健康教室
（写真はいずれも京都市中京区・京あんしんこども館）

不慮の事故による子どもの死因（厚生労働省「令和5年度人口動態統計」）は0～4歳までは窒息、5～14歳は溺水が最も多い。次いで交通事故で、以上の三つで9割近くを占める。
正しくチャイルドシート
交通事故による死傷を防ぐためには、なによりもチャイルドシートの着用。正しく装着しないとシートベルトで腹部などが圧迫されて損傷するので「シートベルトを鎖骨と骨盤にかけて骨で支える」。
自転車乗車中の死亡事故の半数以上は頭部損傷が致命傷になっており、必ずヘルメットを着用する。着用率の高い愛媛県は高校生にヘルメットを無償配布しており、小さい頃からの習慣化が大切という。
静かに溺れる
溺水事故が発生する場所は、自宅の風呂浴槽が半数近くを占める。防止対策と

窒息・溺水・交通で9割 安全な環境作って



誤飲や転落など家庭での不慮の事故をなくすための対策が学べる「子どもセーフティハウス」

子どもが溺れるときは大きな声を出して「救え！」「助け！」と叫ぶ。子どもは「口の中に指を突っ込んで取り出そう」としてはいけません。背中を手のひらの付け根でたたく「背部叩打法」などを説明した。
電気ケトルやストープなどによるやけども注意する。「保育所では熱湯や誤飲事故の原因になる物は子どもの手の届かない場所に片付けられている」として、家庭でも管理の徹底を求めた。
社会全体で守る
近年は高層階からの転落事故もある。高所の恐怖が薄れているのも要因という。ベランダや窓の近くに足場となる物を置かない▽子どもだけを置いて外出しない。1人でベランダに出さない▽ベランダに出ないよう補助鍵を付ける▽などの対策を求めた。
「いまだに多くの人が『自分は事故に遭わない』と考えており、事故に遭っても『運が悪かった』とあきらめる」とし、「親が目を離しても死亡事故や重い後遺症を残す事故が起らないような安全な環境をつくり、社会全体で子どもを守る意識が重要」として、保護者の対応と、事故防止対策への補助など社会の後押しを求めた。
「プラスチック製品。日本は畳や床に座る生活様式もあり、世界的に誤飲の発生頻度が高いという。子どもの口に入る大きさ（直径39mmが一つの目安）と、手が届く範囲（台の高さと手の届く範囲の合計が1歳児で約90cm、2歳児で約110cm、3歳児で約120cm）を理解することが大切。手の届く範囲をメジャーなどで確かめ、テープなどで目印を付けておく。誤飲防止対策については同館のモデルハウス「子どもセーフティハウス」で詳しく説明している。
子どもが溺れるときは大きな声を出して「救え！」「助け！」と叫ぶ。子どもは「口の中に指を突っ込んで取り出そう」としてはいけません。背中を手のひらの付け根でたたく「背部叩打法」などを説明した。
電気ケトルやストープなどによるやけども注意する。「保育所では熱湯や誤飲事故の原因になる物は子どもの手の届かない場所に片付けられている」として、家庭でも管理の徹底を求めた。
社会全体で守る
近年は高層階からの転落事故もある。高所の恐怖が薄れているのも要因という。ベランダや窓の近くに足場となる物を置かない▽子どもだけを置いて外出しない。1人でベランダに出さない▽ベランダに出ないよう補助鍵を付ける▽などの対策を求めた。
「いまだに多くの人が『自分は事故に遭わない』とを考えており、事故に遭っても『運が悪かった』とあきらめる」とし、「親が目を離しても死亡事故や重い後遺症を残す事故が起らないような安全な環境をつくり、社会全体で子どもを守る意識が重要」として、保護者の対応と、事故防止対策への補助など社会の後押しを求めた。

